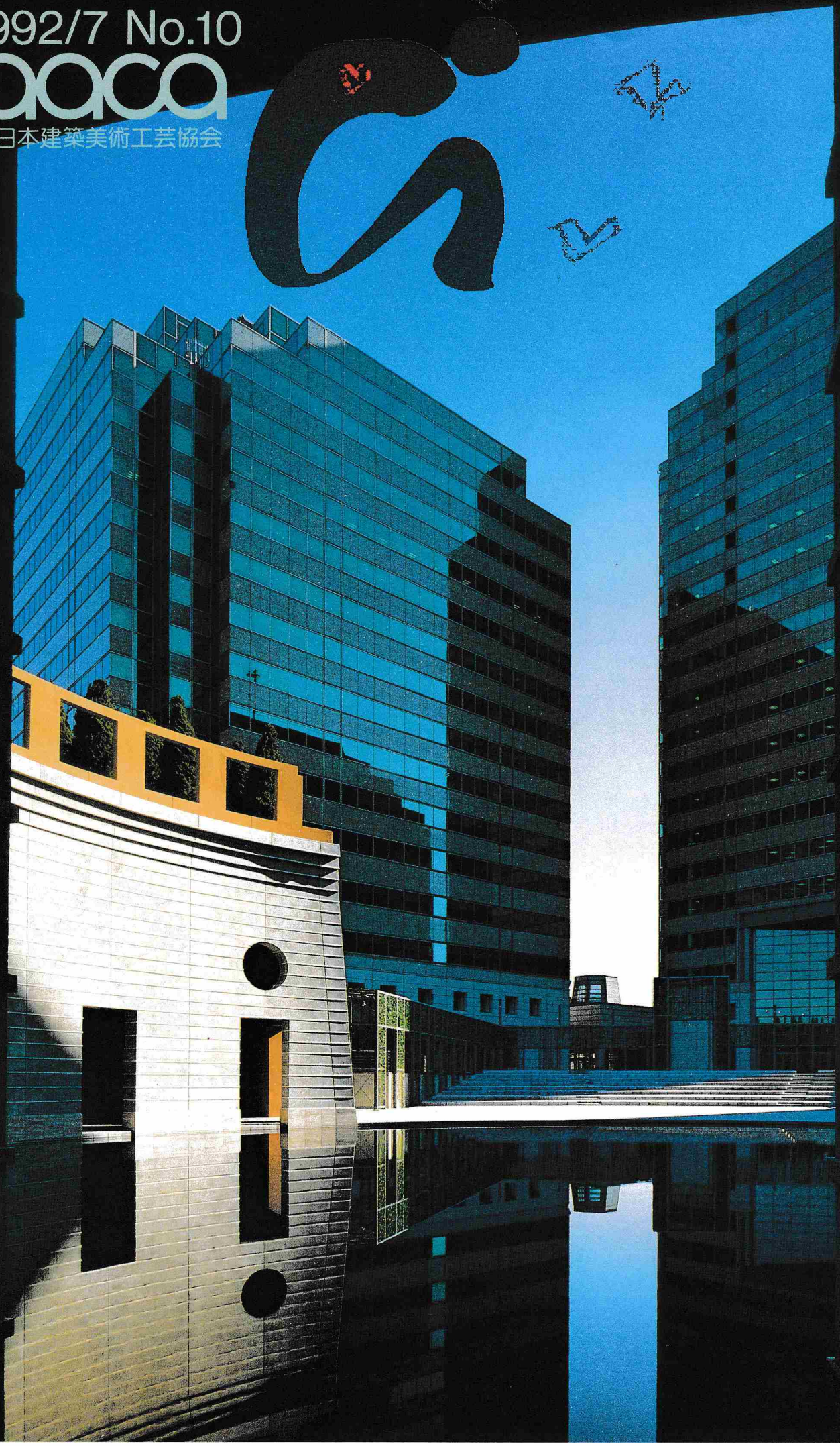
1992/7 No.10

aaca

社団法人日本建築美術工芸協会



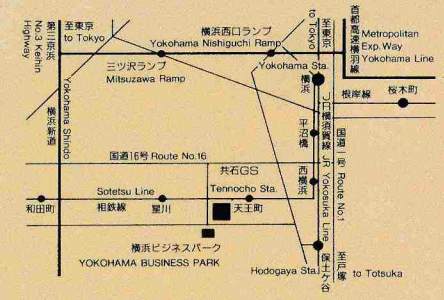
CONTENTS

「横浜ビジネスパーク」
三井利忠……1
YBPのデザインコンセプト
牛山恭男……2
横浜ビジネスパークの設計に関して
尾関勝之……3
YBPの公開空地とアート空間
秋元康幸……4
YBPのアートディレクション
河北秀也……5
Y・B・P 散歩話
鈴木　丘……6
横浜ビジネスパークの街づくり
林　智彦……7
時代の華一輪
江添栄一郎……8
小峰貴芳……9
静岡シンポジウムに参加して
本波　潔・安藤兼郷……10
坂本和正・砂畠睦子・葭野一恵……11
私の近況　小池　保……12
TOPICS……12

■表紙写真：横浜ビジネスパーク

所在地：横浜市保土ヶ谷区神戸町134他

撮影：村井　修　　© 村井　修



ART WORK

①「風景の象嵌一円」 Inlaid Scenery-Circle
関根　伸夫

②「へこみのあるボール」 INCURVATED BALL
丑久保　健一

③「ダンス」 DANCE
福田　繁雄

④跳躍・890　JUMPING・890
跳躍・244　JUMPING・244
鈴木　丘

⑤Indian Congress　インディオの会合
Felipe Lettersten　フェリペ・レターセン

⑥「TELE PARTY」 テレパーティー
Jurgen Goerts　ユルゲン・ゲーツ

⑦「犀－2」 RHINOSEROS-2
安藤　泉

⑧「エデン」 EDEN
明地　信之

⑨「犬モ歩ケバ」 Every dog has his day
藪内　佐斗司

⑩TIGER　タイガー
Klaus Kammerichs　クラウス・カンマーリヒス

⑪「泉月夜－II」 MOON NIGHT OWL
手塚　登久夫

⑫「石をだく鎖」 CHAIN EMBRACING STONE
三沢　憲司

⑬「Leacach An Tigh Chloiche」
月食の観測器
Michael Kenny　マイケル・ケニー

⑭「時空のはじまり」 The beginning of the form
岡本　敦生

⑮「行列」 People Line
三木　俊治

⑯空相－風景の指輪　Phase of Nothingness -Ring of Scenery
関根　伸夫

⑰「雪庭－春夏秋冬」 SNOW GARDEN-SPRING, SUMMER, AUTUMN, WINTER
三沢　憲司

⑱「スパイラル 6」 Spiral-6
建畠　覚造

⑲「トーラス」 Torus
関根　伸夫

⑳刻まれる壁　THE ENGRAVED WALL
安藤　堅

㉑GROSSER TELLER IV　グローサーテラーIV
Fritz Koenig

㉒飛ぶ形'90　FORM OF SOARING'90
小清水　漸

㉓水平と垂直に犯された球　Sphere invaded horizontal and vertical
堀内　正和

TOSHITADA MITSUI
三井利忠
野村不動産㈱ 常務取締役
ビルディング事業本部長

「横浜ビジネスパーク」

日本経済の強さの源泉は世界各国に比して著しく均衡を欠く長時間労働にあるとの指摘がなされている。また一方、豊かさの時代といわれ、生活時間の余暇への配分強化が主張されている。企業にとっての最近の大きなテーマは「時短」であるといえよう。

東京圏への経済・政治の集中は、集中のメリット享受の反面、デメリットが大きな社会的な負担となってきている事情があり、様々な是正策が講じられているものの、その流れに大きな変化はないように見える。

「横浜ビジネスパーク」は東京都心から30km離れた横浜市保土ヶ谷区の住工混在地区に計画された「複合型都市開発」事業であるが最も大きなねらいは、都心へ集中する経済機能の分散の受け皿としての役割であった。また横浜市は人口320万人を越える政令指定都市ではあるものの、ガリバー東京に近接していることから昼夜間人口比がバランスを欠いており、業務系都市開発を志向する事情もあった。

企業にとっては将来を担う人材の獲得は経営戦略の重要テーマであり、遠距離通勤、就業空間の快適性、入居ビルのアイデンテティなど、リクルート戦略に様々な観点からの改善策が求められてきている。またオフィスにおける業務のあり方にもOA化の進展で、一人当たりの使用床面積の拡大といった流れがあり、採用人員の多い企業にとっては毎年の新規需要床確保は量のみならず、高品質のオフィスを確保することが必要となってきている。

横浜ビジネスパークはこれらの要請にも応えられる豊かな都市空間を実現するために様々な工夫がこらされている。マリオ・ベリーニ氏を起用した丘段状プラザ・ガレリアの実現であり、人・建築・芸術のやさしい関係を築こうとした「アート計画」もその一例である。今後は芸術展の開催や横浜ガレリアにおけるシャンソン・コンサート等のイベントなど街の運営についても力を注いでいく考えである。

©

YASUO USHIYAMA
牛山恭男
野村不動産㈱ 建築部次長

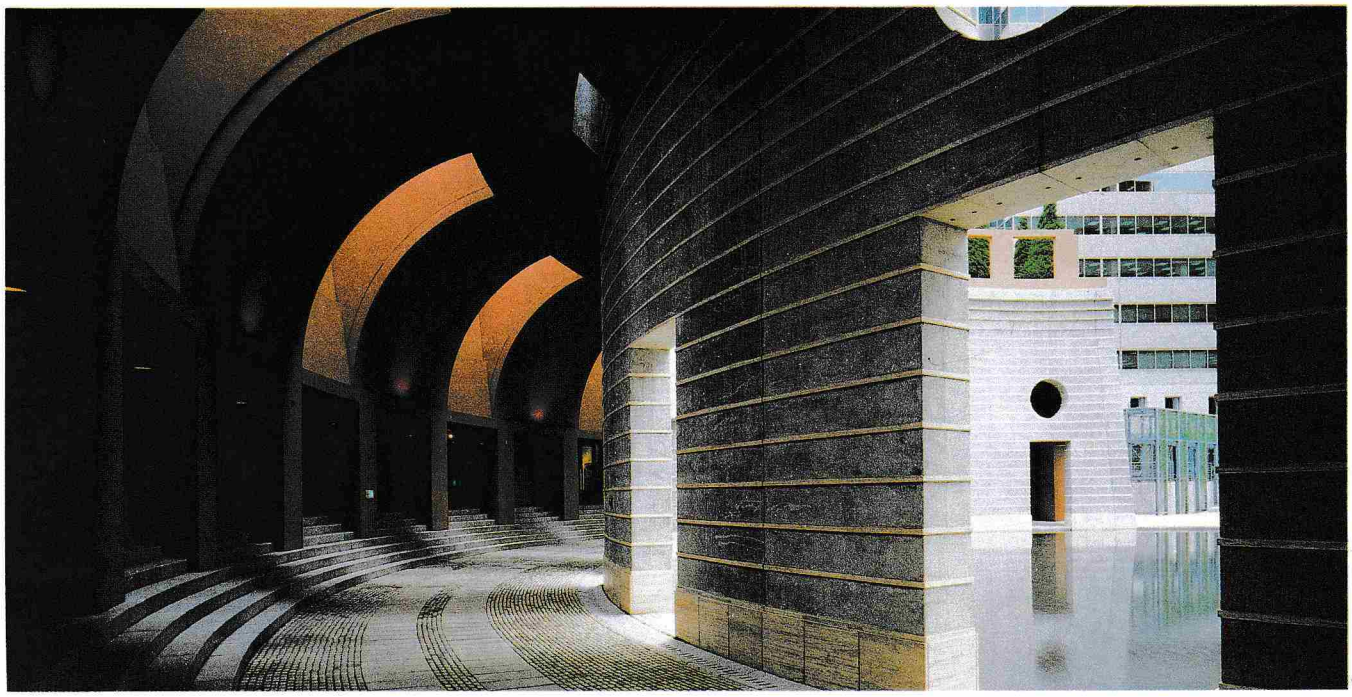
YBPのデザインコンセプト

高度情報化社会に対応する最先端の設備・機能を備えた「横浜ビジネスパーク」の設計にあたって、われわれが「人間中心の都市づくり」という原理的な理念にたち帰り、それをもっとも重要なコンセプトとして計画を進めて来た背景には大きくふたつの理由がある。ひとつは近代、特に第二次世界大戦後の産業＝経済優先の価値観に基づく建築とその集合体である都市づくりへの反省である。今ひとつは、近年の産業構造のパラダイムシフトによる、オフィス空間の位置づけの変化である。今や生産の主役であるオフィスにおいては、快適な知的創造空間の創出が必須条件であろう。

©

「人間」にとっての快適な環境＝アメニティをわれわれはいわゆる人間工学的な部分と、人間の感性や情緒的な部分とのふたつの面よりとらえている。つまり、目にまぶしくない均質照明、小区画で制御できるきめ細やかな空調システムなど、技術に裏付けされたエルゴノミクス的快適性と、知的労働による精神的な疲れを癒したり、心にゆとりを与え、あるいは感性を刺激して創造性を喚起せしめるというような、心の快適性である。この「心の快適性」こそ、われわれが「横浜ビジネスパーク」のデザインを通して追及してきたテーマである。

人間を中心に置き、その心に快適性を与える質の高い建築空間や環境を創出する為に、「横浜ガレリア」のデザインを依頼したマリオ・ベリーニ氏をはじめ、内外の優秀なデザイナーの協力を得て設計を進めてきた。そして、アート計画については、河北秀也氏にアートディレクションを依頼し、「ユーモア」をコンセプトに、「美術のイデオロギーで括るのではなく空間全体を温かい人間性で包み込んでいこう」という主旨のもとで、建物内外に空間と一体となった文化の香りのする密実な環境を現出させている。これは、心に豊かさと潤いを与えるという横浜ビジネスパークの重要なポイントとなっている。



©

MASAYUKI OZEKI
尾関勝之
大林組 設計本部 課長

横浜ビジネスパークの設計に関して

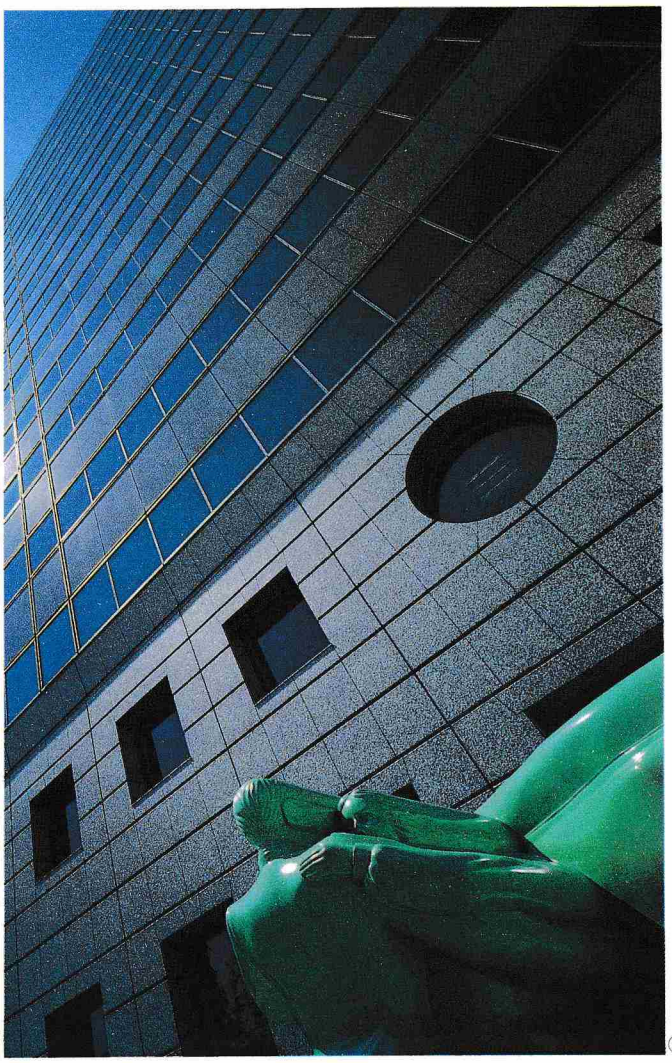
ＹＢＰは、総面積13.1ha、施設の総延面積24万㎡の規模を有し、周辺部が住宅に囲まれていることから、既成の市街地開発には見られない新しいタイプの開発といえる。

計画に当って考えたことは、これだけのボリュームの施設群が、周辺住宅環境に対し脅威にならない存在であること、敷地の６割に当る空地を、知的で文化性の高い空間とし、周辺部に開放され、地域に活性を与えるものにすることであった。

ＹＢＰの空間構成を考える時、まずそこにはインパクトの強い中心性の高いものの存在が必要であった。幸いイタリアの建築家マリオ・ベリーニ氏のデザインにより、立体的な広場の提案がなされ、これを採用することで、計画の核となる部分が形成された。いわゆるベリーニの丘の空間は、中央に遊水池機能を備えた池を配し、それをとりまく様に明るさと暗さのリズムの強い回廊が用意され、周辺に斜面状に延びた散策路をもっている。この印象深いベリーニの丘と、広場を構成するきめの細かいペーブメントのデザインと、高層棟の１、２階の基壇に当る部分の表情が、一つのバランスを保つことで、ベリーニの丘が計画全体から遊離することなく、ＹＢＰ全体の空間構成に統一感を与えている。高層３棟の１階にはそれぞれ芸術性の高いテーマをもったホールを設け、２つのエントランスホールと、ベリーニの丘の回廊を巡ることで、今までのオフィス環境では経験し得なかった質の高い空間が構成されることとなった。

高層棟群は北側の住宅への日影を考慮に入れ高さを 100 m以下とし、敷地南に配置、その表情も周辺住宅へのボリウムの脅威を避けるため、重厚な表情を避け、プレーンな表装とし、反射率の低いミラーガラスと花崗岩本磨きで構成、上方に行くにしたがって徐々にガラス量が多くなり、最上階ではガラスが青空に溶け込むような軽快さをねらった。

©



©

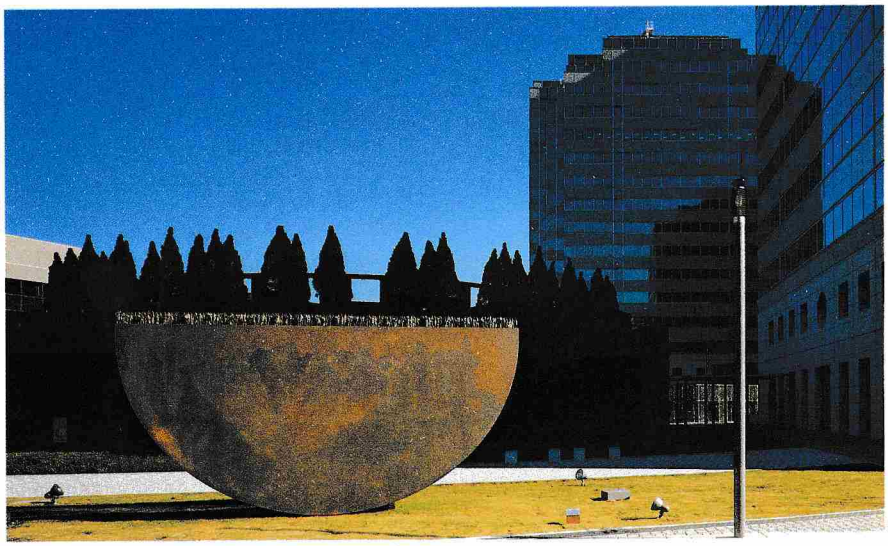
YASUYUKI AKIMOTO
秋元康幸
横浜市都市計画局都市デザイン室
係長
横浜市中区港町1-1
TEL.045-671-2023

YBPの公開空地とアート空間

『横浜ビジネスパーク(YBP)』は、オフィスビル群の開発の中で、新しいタイプの広場づくり、アート空間づくりを行っている。大規模オフィスと周辺住宅地、質の高さと親しみやすさを共存させるという難しい課題に挑戦し、公共的空間でのアートのあり方に新しい提案を行っている。この成功には、有能なデザイナーとアートディレクターの登用がおおきな要因となっている。

まず、YBPの空間の特徴は、建物群に囲まれた中央の立体的な広場にある。建物と建物の隙間を抜けていくとそこにきわめて印象的な広場が広がる。何回訪れてもいつも新しい発見がある空間である。管理が行き届いた公開空地で、落ちつきのある空間は周辺住民にとっても憩いの場となっている。イタリアのデザイナーであるマリオ・ベリーニ氏設計によるこの立体庭園は、緑豊かな段丘の「ベリーニの丘」と、円形の「水の広場」、段状の観客席からなる「ベリーニプラザ」とから構成されており、空間全体がアートとも言える質の高さである。

そして、オフィス1階のギャラリー部分、建物まわりの空間は、様々な彫刻や絵画がおかれており「横浜ガレリア」と呼ばれている。ここでは、アートディレクターとして河北秀也氏が全体のコーディネートを行っている。テーマは、「ユーモア」、ここではあえて楽しいアート作品が多数配置されている。特に動物のゾーンは、大変人気があり、堅くなりがちなオフィス空間にほほえみを提供している。周りの住宅街の人々にも好評で、土日は子供連れの家族が多く訪れている。昨年(1991年)5月には水の広場のまわりのギャラリーで、横浜市と共催で「芸術が都市をひらく－フランスの芸術と都市計画」展が開催された。また、同時に水の広場ではシャンソン等も演奏されており、今後この様な催し物が継続的に開催され、周辺住民にアートの楽しさを感じさせていただきたい。



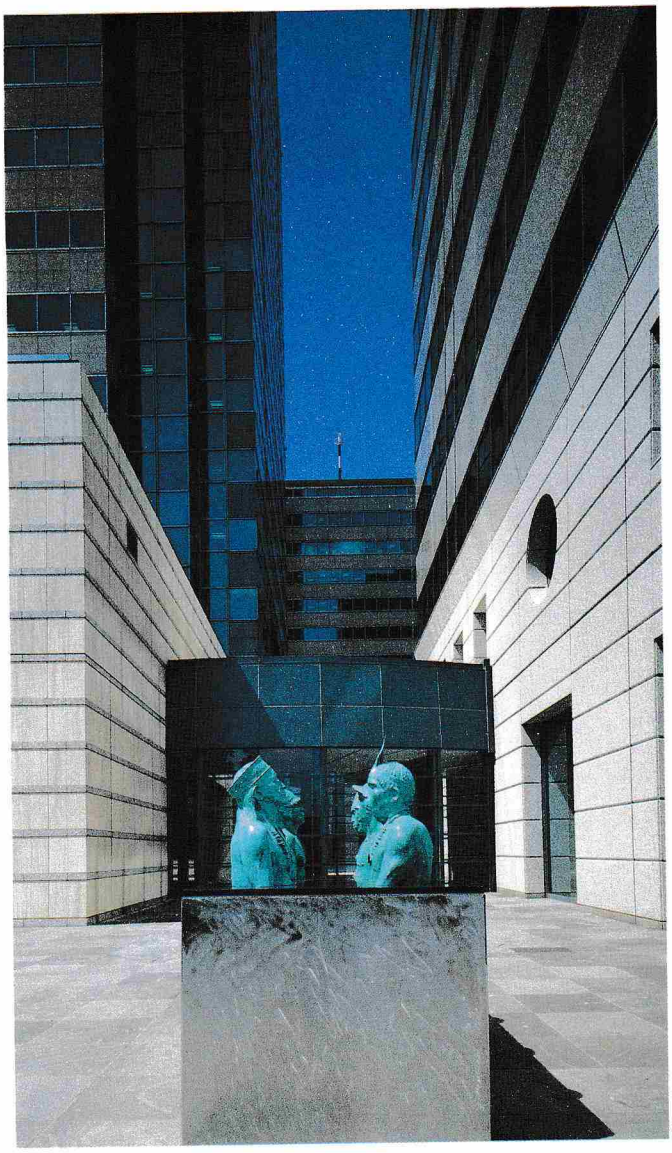
©

©

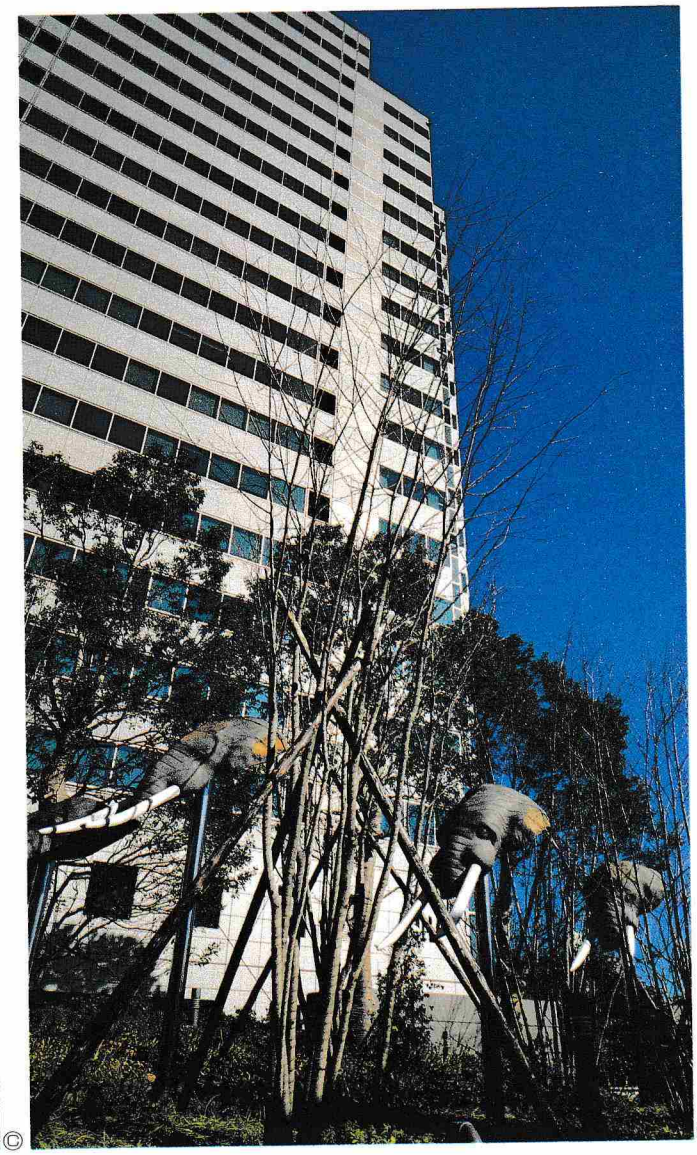
HIDEYA KAWAKITA
河北秀也
㈱日本ベリエールセンター代表取締役
アートディレクター

YBPのアートディレクション

横浜ビジネスパークは13haにも及ぶ大規模な都市開発事業である。この敷地全体にかなりの数の美術作品を取り入れて、アートによる環境整備を行ないたいとのことで、私のもとにアートディレクションの依頼があった。しかし単に美術作品を並べても、周囲に「ゆとり」や「潤い」を与えられるものではない。そこでこの敷地全体を一つの美術館と考え、空間全体を統一された「ユーモア」というコンセプトで包込むという基本構想をたてた。建築物の１階のギャラリー部分に加えて野外の空間を７つのゾーンに分け、それぞれ共通のテーマのもと「ユーモア」の基本コンセプトが敷地全体を貫くようにした。また、ベリーニの丘周辺では横浜美術館や美術大学の協力を得て企画展などを行ないながらアート空間として有効に使われるように構想をたてている。芸術思想や国や時代でアートを切るのではなく、ユーモアというコンセプトでアート空間をつくったのは世界でもあまり例がないことではないかと思う。最初は施主側にも、ユーモアというコンセプトそのものにかなり抵抗があったようだが、設置されるにつれて少しずつ理解が深まってきたようである。また周辺の住民の方々にも評判が良いようで、休日には家族でのんびりと作品を観賞している姿がみられる。現在予算の都合もあって基本構想の全てが実現されたわけではないが、年間を通じて積極的に企画展を行なうなど地道な作業の積み重ねが行なわれている。ＹＢＰの実験はささやかなものである。だが企業の存在そのものが文化であるとの認識にたつとき、経済が世の中を支配する時代は、経済のことだけ考えていては経済を全うすることはできないということを、このＹＢＰの事例は示している。



©



©

KYU SUZUKI
鈴木　丘
彫刻家

Y・B・P散歩話

「彫刻の脇のベンチで座っている人、彫刻を見てなにか思索に耽っている様子ね。」「彫刻効果ってところかな。」「電話しながら作品を観賞出来るなんていいわね！」「電話する人も作品の一部になるように配置してあるんだ。ほら、タイトルを見てごらん。"Tele Party" でしょ。」

カメラを構えている私、植込から職人さんの声、「あの、知ってます？この石の長さは走り幅跳びの世界新記録、あっちは走り高飛び。」「へー、そうですか。」・・・この作品が多重の意味を持っていること教えてあげるべきか、どうしようか、ここは時間が無いので先に歩こう・

ベンチ代わりに作品の石に座っている母親、子供に向かって「彫刻の背中に登っちゃだめですよ!!」

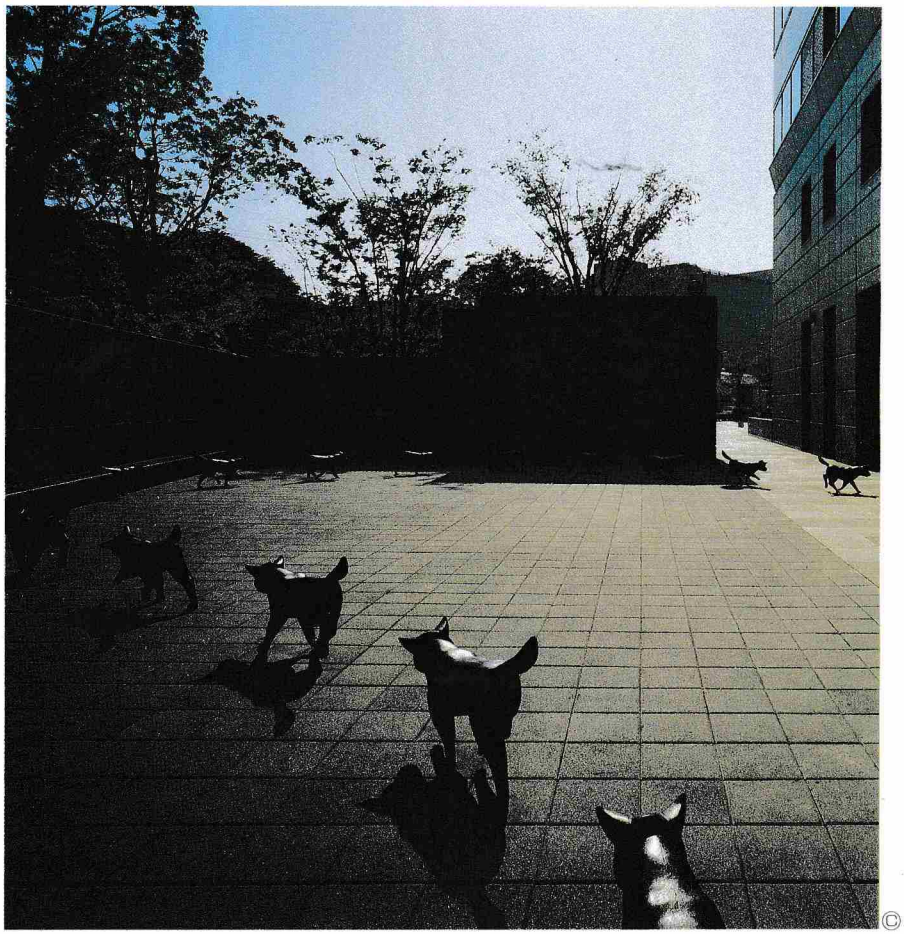
「ねえ、この犬あと一頭ガラスの向う側にいるともっと面白いと思わない？」「うーむ、なかなか鋭い。でも、まあ色々と条件もあったんでしょ。作家だって思いどうりにはならない事ってよくあるもの。」

「お、植栽も程よくおちついて犀も象も都会の草原で生き生きしている。でも、都会育ちの樹々皆ワイヤーで引っ張られている。自然も管理されないと生きていけないんだね。」

「キャ！、石が空に！反重力？!」「よーく考えてご覧、科学的、常識的に、僕らの弱いところかもしれないけど。安全性が保障されなければ設置されるはずないでしょ？石はもちろん本物。」「作品を解剖し、分析して無くなっちゃったらいやだわ。建物の中も楽しみね。」

「ずいぶん歩いたからその前にお茶でもどう？」「じゃあ、あの糸杉の丘でランチにしましょうよ。」

©



©

TOMOHIKO HAYASHI
林　智彦
野村不動産㈱ YBP事業部事業企画課長

横浜ビジネスパークの街づくり

水辺で語り合う若い主婦たち。その周りで無邪気に遊び回る子供たち――これはソニー、オムロン、日本DEC、野村総合研究所等の一流企業が入居する「横浜ビジネスパーク」における日常的光景である。都心のオフィス街にはみられないこういった光景が、この街ではいろいろな所で見ることができる。

「横浜ビジネスパーク」は東京都心におけるオフィス需要の急激な増加によるオフィス床の不足、賃料の高騰、交通事情の悪化等、オフィス環境の悪化に対処するために「バックオフィス」をコンセプトとして誕生した。ここに入居いただいた企業は、ソニーをはじめとした研究開発型の企業が主で、都心から移転してきてここで知的創造活動をおこなっている。都心を離れて創造活動をおこなうということはある意味では知的刺激の不足、情報の不足、交通等利便性の不足等さまざまなマイナス要因を抱えることになる。従ってそのようなマイナス要因を補うことができなければ、企業はこの街に進出してくれないだろうといった強い危機感があった。それらを補うことのできる質の高い、しかもにぎわいがあり、アメニティの高い環境を生み出すことが我々の課題であった。

©

現在、NRIタワーの南側にある散策路は近所の人々、ここに勤めるビジネスマンの散歩道になっている。そこには優しい目をした犀（安藤泉 作）や象の群れ（明知信之 作）がたたずみ、道の入口には梟（手塚登久夫 作）が人々を静かに見つめている。またそこに面した中庭には犬が十数匹（藪内佐斗司 作）、子供たちとたわむれている。こうしたアート空間とともにマリオ・ベリーニのデザインによるイタリアの回廊に囲まれた静かな円い池など質の高い環境を創造することにより、私達は知的創造活動によりふさわしい街を目指している。

©

◉マリオ・ベリーニ　プロフィル

1935年生まれ／ミラノ工科大学卒業／インダストリアル・デザインを中心に建築プロジェクトでも活躍／現在、イタリアのデザイン建築協会（ADI）会員、建築雑誌「ドムス」の編集長を務め、マリオ・ベリーニアソシエイツ主幹／オリベッティのタイプライター、ルノー、ランチア、象印のエアポット、ヤマハ等の工業デザインでも有名。

洋画家・壁画家
EIICHIRO EZOE
江 添 栄一郎
独立美術協会 会員
神奈川県平塚市代官町12-41
TEL.0463-21-0231

富士の湧水、柿田川

『富士の湧水、柿田川』

新緑の季節となると庭の木々に多くの小鳥たちの歌声が日増しに楽しさを奏でる、河口近くの川辺を訪れると天然遡上の若鮎が銀輪を靡かせながら遡上する姿を見るにつけ小さな生命の躍動感を私は覚える。6月の鮎の解禁を想うにつけ若鮎を楽しく釣る方法がある、毛ばり釣りで、しかも自製の赤バケなるものを作成す、伊豆の若鮎釣りの伝統的な仕掛で江戸時代頃からと聞くが？昔の女性のお召物の裏地に使われていた、この赤い絹地こそ（もみの布）であって、もみの布を手にするとき、ふと昔の人々の優雅な生活が着物の絹ずれの音と共に現われる幻想を、もみの布をとうして私に伝わってくる、なんとロマンに満ちた時ではないかと、もみの布を少しずつ解いて小さな赤袖ばりに巻きつけて赤バケ仕掛が出来る、赤バケの毛ばり釣りは夏の夕立や大雨後の場合が良く、今年も渓流に出向き楽しい若鮎釣りを胸に秘める。

東海道線の三島駅に降りたつと眼前に富士の雄大なる姿に、いつも大きな感動を覚える。

富士の湧水群、柿田の泉は三島市内の国道1号線三島バイパス線の直下から湧き出し、1.2㎞流れて狩野川に注ぐ川です。富士に降った雪や雨が地下の三島岩流の空洞を通って流れ出して、ある学説によるとこの伏流水は約50年位の期間をもって、その溶岩流の末端に位置する清水町の柿田で地上に急に湧き出す、水温は年間を通じ約15度で湧水量は日本一で1日80万トンを超え最高級の水質は日本名水百選に選出され静岡県東部35万人の生活を支えている。貴重な生物の宝庫と共に、その自然樹林が大古の姿で岸辺の傾斜地に繁茂し、種々の水辺、水中植物が連続しあい湧水群の湿地帯に原始の景観を今に伝える。昆虫のホタルやトンボ等、魚類はアマゴ、鮎など植物はミシマバイカモ（柿田川だけ）の可憐な水中での開花の様子は大変に素晴らしく白い小さな梅の花に似た姿を見せてくれる、鳥類では魚とりの名人といわれるカワセミ、ヤマセミが魚を捕える瞬間の腕前はさすがで、求愛行為の一環としての微笑ましい姿をも見ることがある。初冬には約50万匹もの鮎の大群が柿田川に再遡上し産卵する様は壮観であって、私は30年間もこのラストハイライトシーンを、その感動は他に比べ様がない、鮎は産卵後年魚としての一生を終る。この遡上せる鮎をエサ釣りで岸辺にて釣る楽しみも風物詩で、柿田川本来の姿なのかも知れない、釣った鮎の内蔵を塩漬にした「潤香」は左党にとって垂涎のウルカで、これは「苦ウルカ」内臓と卵巣でのそれが「白ウルカ」等、作ってから賞味するまでに半年間の熟成が必要だ、私の自製の「潤香」は絵画の制作と共に長い間の年輪を蓄えて作成する味は天下一品也。私は柿田川みどりのトラスト委員会の会員として環境破壊から柿田川の泉を守るべく、これからも環境保全に努力したく思う。永遠なるかな柿田川の泉。

富士の湧水、柿田川

鍛鉄造形家
TAKAYOSHI KOMINE
小 峰 貴 芳
㈱アトリエ遊火山(ユウカザン)
埼玉県比企郡玉川村明1124
TEL.0493-65-3848

煙のような鉄

最近、パイプに興味を持ち出した。あのふくよかなヴォリュームの中にも、緊張感のあるフォルムをおもちゃにしていると、頭の中がブォア、ブォア、と煙のように漂いはじめ、ふらぁ一と鍛冶場から退却している。一年中、鉄と友達ではいられない。普段は素朴で、寡黙で、やわらかな鉄も、たまに、重くて、冷たくて、自分との関わりを拒絶するたんなる工業材料に見える時がある。

朝から晩まで顔を突き合わせていると、突然喧嘩を売りたくなり、いきなり冷水に放り込み、絶交宣言を言い渡すことが、ごくごく稀にあるがふと、工房の片すみに目をやると、意外にも討ち両にした輩からがけっこうごろごろしている。

意気焦心して制作意欲を削がれた時は、パイプ作りが良い気分転換になる。

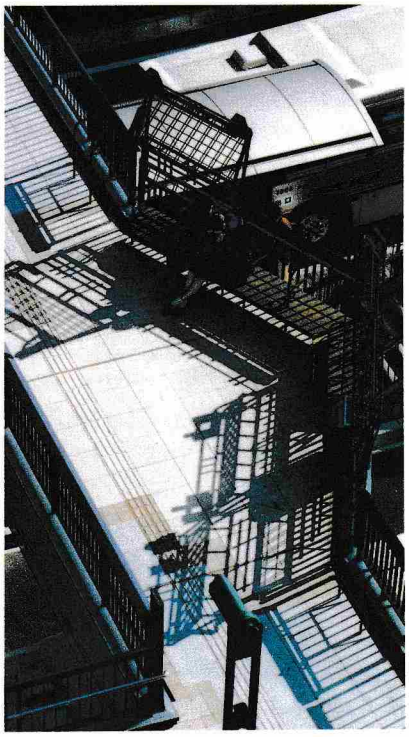
原木であるブライヤーをいつくしみ「お前は鉄より柔らかい、木目がきれいだ、失敗しても失敗しても、まあ、あまり腹は立たない。」とブツブツ言いながら、のめり込んでいると、いつしかまともに鉄と向かい合う気になれる。

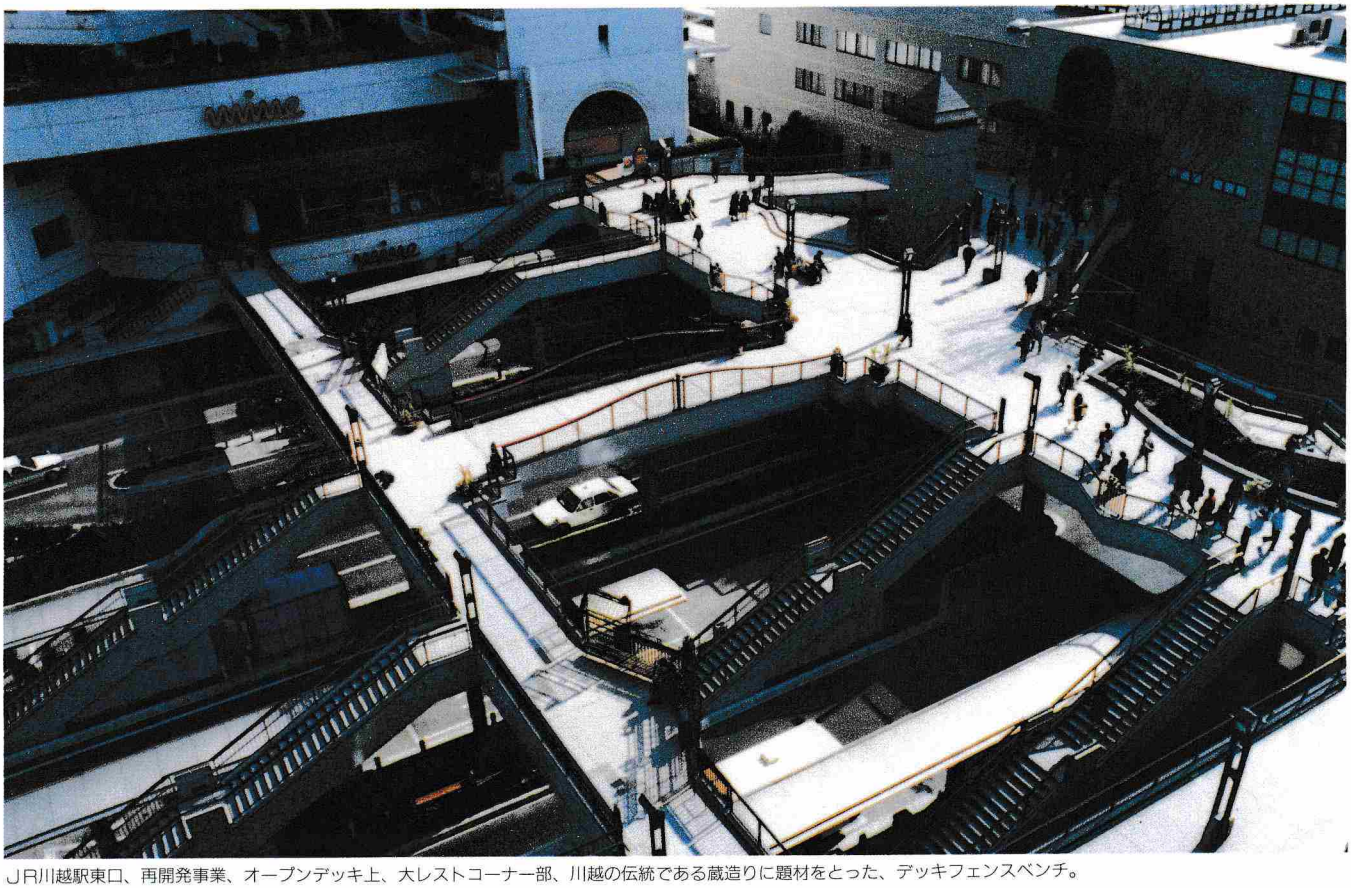
鉄達とつきあい始めて、20年ほどになるが叩き込んでゆくと地味だがジワッと、豊かな表情を見せてくれるのでなかなか曲者である。

世に現出する作品は、人とコミュニケーションが出来ることにより、その後数十年、数百年の寿命の中で自身の風合いを自ずと造ってゆくと思う。

時のランドマーク――人の心にメモリアルマークとして刻みこまれる物体。

媚びるで無く、いじけるで無く、雨に打たれ、埃をかぶり、傷つけられるのも年輪。やたらと美味い、……はず?





JR川越駅東口、再開発事業、オープンデッキ上、大レストコーナー部、川越の伝統である蔵造りに題材をとった、デッキフェンスベンチ。

静岡シンポジウムに参加して

建築家
KIYOSHI HONNAMI
本　波　潔
㈱綜合設計事務所取締役
静岡県清水市小芝町4-13
TEL.0543-64-5511

グラフィックデザイナー
KANESATO ANDO
安藤兼郷
㈱シーエスシーデザイン
浜松市城北1-1-3
TEL.053-473-5015

静岡シンポジウム奮戦記

今回、私は静岡県内に在住する会員のひとりとして、静岡シンポジウムに裏方として参加することができました。

特に、私の身勝手から展覧会の同時開催やパンフレットの製作など、新しい提案を出したことは、多くの関係者を悩ませてしまったようです。この結果、静岡在住会員のみなさんの協力をあおぐことになり、安藤兼郷さんは、ポスターとパンフレットのデザインを担当し、栄田理志さんは、展覧会『都市デザインの今』の運営を会社のみなさんを動員してやってくださいました。そして川村映子さんは、懇親会やパネリストの宿泊とゴルフ親睦会の運営を全面的にやってくださいました。それぞれの立場で力を発揮してくださったことは、大変心強いものでした。

一方、静岡シンポジウムを成功させるために、私達の提案を受け入れてくださった事務局や役員と委員のみなさんに、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。

また、忙しい時間をさいて参加してくださった川村文化庁長官や、パネリストの有馬真喜子さん井上章一さん岡並木さん森本哲郎さん内井昭蔵さんからは、新鮮な景観論を提供していただきました。

今回のシンポジウムは、私にとって、かけがえのない体験であり、多くの関係者の温かい思いやりに接することができました。

最後に、今回のシンポジウムに側面から支援してくださった、静岡県庁の都市住宅部のみなさんに『ごくろうさまでした』と一言付け加えさせていただきたいと思います。

日本の都市景観と富士山

'92AACAシンポジウムを、静岡の地において開催できたことは、有意義で優れた「種」が蒔かれた“吉日”であることを体感した。ひとつぶの種が静岡の地で大きく成長することを願うものです。

開催日は、不純な天候で霊峰富士も顔をみせず、また運営にも何かと不備な点もあったかと存じますが、この機に紙面をお借りしてご参加いただいた、皆様方に静岡会員一同からお詫びとお礼を申し上げます。

静岡シンポジウムでは、裏方のためパネラー先生方のご意見を拝聴する機会を逃し残念でしたが、それにもまして、ディスカッションが終了し退場する参加者のお顔の満足感と、交流の集いでの華やいだ皆様の談笑が、「日本の都市景観と富士山」のテーマに相応しいディスカッションの「解答」であったように感じました。人がいて人が楽しく語らうことのできる空間こそが、私にとっての都市景観であると、勝手な理屈も付記させてください。

本当にありがとうございました。

インテリアデザイナー
KAZUMASA SAKAMOTO
坂本和正
方圓館館長
世田谷区松原3-18-11
TEL.03-3322-1217

テキスタイルデザイナー
(タピストリー)
MUTSUKO SUNAHATA
砂畠睦子
横浜市神奈川区浦島町5-16-707
TEL.045-451-5973

HITOE YOSHINO
葭野一恵
東陶機器㈱営業開発2課
港区虎ノ門1-1-28
TEL.03-3595-9446

'92静岡シンポジウムに参加して

私は、昨年の'91・茨城：水戸シンポジウムにも参加し今回が二度目である。前回のテーマ展開は、建築家や芸術家がそれぞれ街に向けて何を発信できるかに論点が集中していたと思う。今回は、またそれとは違った意味での面白いやりとりで会場は盛り上がった。

“富士山”という私たちにとって最も象徴的かつ具体的な美は、パネラー諸氏の専門的な論旨を誰にも分かりやすく共有させるためであったといえる。「街なみの美」と人が言うとき、その美はどんな美なのかの解釈は応々にして諸外国の事例などとの比較で説明せざるを得ない。その点今回は、聴衆も含めて会場内の美意識の共通言語をばらばらに分解することなく会話が進行していった。

話の中で私にとってとりわけ興味深かったのは、人間によって何らかの手が加えられた自然を、はたしてまがいものの自然だと言いきれるのかという問いかけであった。また、いまひとつは、従来からの日本人の美的いとなみは近視眼的範囲のきめこまやかさにあり、異文化のそれとは際立った相違があるという指摘であった。これらの意言は、国際化する日本社会での今後の美意識を批判的によく言い当てており、私のようなデザイナーがこれからの社会に対してどんな造形表現を提示すべきなのかを暗に教えられたような気がした。また、現代の景観の形成を住民の自発性にゆだねるのか、それとも社会集団にもっと知恵をしぼることを喚起させる新たなモデルを創意工夫をするのかの議論の分れ目も、実は今後を大きく示唆していると思った。

この種のシンポジウムは、ややもすると方法論の繰り返しや甘味な問題提起に終ることが多いなかで、静岡シンポジウムはそのどちらでもなく、分りやすく的をついていた。街なみの論議をしながらも、ジャンルを超えて美を語り合えるようなシンポジウムは、日本建築美術工芸協会ならではの時代の先取りであると思えてならなかった。

静岡シンポジウムに参加して

都市景観と富士山のシンポジウムへ参加の為、早朝の新幹線に乗って富士市へ出掛けた。午前中県立美術館を見学、午後からのシンポジウム会場は満員の盛況で熱気に溢れていた。当日の印象に残った言葉を少しまとめてみると、パネリストの先生方の富士山に対する想い、昔は東京からよく眺められたという回想となげき等、多くの人々のもつ富士山への切なる敬慕の念に共感、しかしここで私は森本哲郎先生の明解一刀両断のお話に身をのりだし引きこまれた。先生のお話では、地球人口はもうすぐ百億突破、住環境は劣悪で深刻な事態である。

日本人の美の感覚は１mの範囲である。１点を見ることに美を感じ全体感覚が欠落していること。日本三景の眺望の中になんと電力会社の鉄柱が建った等。自分の家はきれいにするが、一歩外に出ると無関心、パブリック意識としての"WE"がない。都市づくりが下手であるという指摘、そして受益者負担の美観税をとってでも電柱を地下に埋めるとよいとの提言、これは素晴しいと思った。

環境をまもるということは、ひとりひとりの意識と広い視野が必要であろう。環境整備はつい人ごとのように思い過していたが、シンポジウムでは、それではいけない事を痛感させられた。機会あるごとに、この点で一社会人として真剣に向い合いたいと思った。

私はタペストリー制作をつうじて建築の室内空間もひとつの環境と捉えているが、その空間全体の中で人々にやさしくあろうとしたくつろぎが、どう関わり活かされるか、挑戦していく上で共感する点が多かった。

この今回のシンポジウムに参加できた事を感謝すると共に、より広い視野がもてたうえ、多くの会員の方々との同時体験と交流が得られたのは有意義であったと思う。

静岡シンポジウムに参加して

さる５月８日に開催された'92静岡シンポジウムに参加させていただきました。

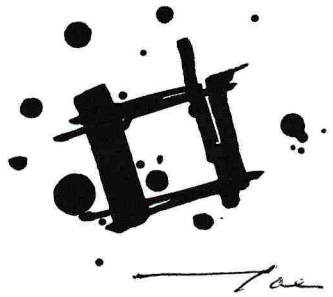
会場に入ったとたん満席の会場に圧倒され、熱気がひしひしと感じられた上、パネラーの方々の個性的なお話しに真剣に耳を傾けてメモをとっていらっしゃる方の多さに驚かされました。

４名のパネリストの方のお話しは示唆に豊んでおり、各々のお立場からの富士山に対しての考え方をお伺いし４時間半がアッという間に過ぎてしまいました。

特に岡教授の説明された、江戸時代の徳川家の都市景観の深い考え方は非常に興味深く、スライドを使ってビジュアルに見せていただいたので「自然の景観」と「都市計画」の調和について深く考えさせられました。

私のような未熟なものは、全ての点でアメリカやヨーロッパの考え方が日本より優れていると考えていましたが、都市景観の考え方１つを取りましても、日本古来のすばらしい自然との調和の考え方に気付かされました。

私は今迄に３回ＡＡＣＡのシンポジウムに参加させていただきましたが、回を重ねるごとに充実してきたのではと感じます。自分自身の勉強の為にも、今後も参加させていただきたいと思います。



私の近況

NHKアナウンサー
TAMOTSU KOIKE
小池　保

平成２年の夏の異動以来、大阪放送局で仕事をしております。アナウンサーとして番組を企画・制作するという、新しい分野を中心に、仕事を続けております。この４月には、ラジオの特集番組として、９時間にわたって全て大阪弁で放送するという「大阪弁でしゃべるデー」を制作しました。放送のあと、朝日新聞の「天声人語」などに取り上げられるなど、意外な程大きかった反響に、スタッフ一同喜んでいるところです。

この２年間に、建築の世界では、出江寛さんや、安藤忠雄さんに、インタビューの仕事でお会いしました。特に、出江寛さんには、その後も親しくして頂いております。

又、イタリアを中心にヨーロッパで活躍中の抽象画家・久保田正孝さん、世界の名画をモチーフにした写真アートで海外での発表が続く森村泰正さんと、建築をはじめとするアーティストのうち、大阪出身の国際派と仕事ができたのもこの２年間の大きな収穫です。これからも、自分の興味関心を大切に、建築家や画家・彫刻家との出会いをプロデュースしながら、21世紀の生活空間の在り方についてのイメージを私なりに膨らませていきたいと考えております。

TOPICS

社団法人日本建築美術工芸協会 第２回ＡＡＣＡ賞募集

社団法人　日本建築美術工芸協会は建築家、美術家、工芸家その他の人々が連携・協力して優れた芸術的環境を創ろうと様々な活動を行い、わが国の都市文化向上発展に寄与したいと願っております。

当協会では毎年、協会目的に合うすぐれた芸術的環境（建築、美術工芸、庭園、インテリアその他パブリックアートを含む）を創造した個人又はグループを表彰し、賞を贈ることにしております。

日本建築美術工芸協会賞（ＡＡＣＡ賞）
上記の賞候補を募集します。

〈応募方法〉

●直接応募
公共自治体・団体、協会会員ならびに協会法人会員所属の方

●推薦応募
公共自治体・団体、協会々員ならびに協会法人会員所属の方の推薦によるもの

〈1992年度　協会賞選考委員〉

委員長　嘉門安雄
（協会副会長／ブリヂストン美術館々長）
會田雄亮
（協会理事／陶芸家）
栄久庵憲司
（協会理事／インダストリアルデザイナー）
宮本忠長
（協会理事／建築家）
小林治人
（協会々員／ランドスケープデザイナー）
三輪正弘
（協会々員／建築家）

応募は、協会所定様式によってお申し込み下さい。
申込みは８月１日㈫から受付け９月11日㈮に締切ります。
表彰は協会設立記念会（11月末頃）において執り行います。

フィンランド現代建築展

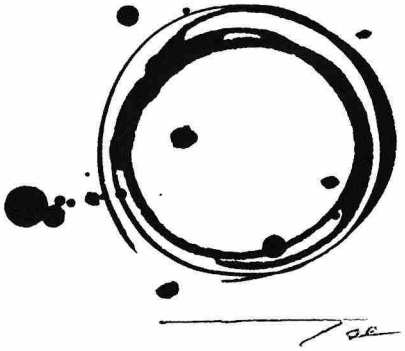
フィンランドの現代建築を世界に紹介するためにフィンランド建築博物館が企画・作成したもの。1992年９月24日より10月19日まで東京池袋メトロポリタンプラザホールにおいて開催される。日本建築学会フィンランド現代建築展実行委員会の推進で行われる。同委員長はＡＡＣＡ会員でもある黒川紀章氏。

会　期：1992年９月24日㈭～10月19日㈪
開館時間は10時～19時
会　場：メトロポリタンプラザ８階メットホール
（東京都豊島区西池袋1-11-1）
入場料：500円
主　催：日本建築学会フィンランド現代建築展実行委員会、フィンランド国立建築博物館、毎日新聞社
後　援：外務省ほか（当協会も参加）
協　賛：清水建設㈱、㈱竹中工務店、東急建設㈱
協　力：フィンランド航空

藤原郁三陶房設立10年・陶壁作品集出版記念

1992年７月29日㈬午後５時よりプラザ・イン・くろかみ（栃木県宇都宮市桜4-1-19）

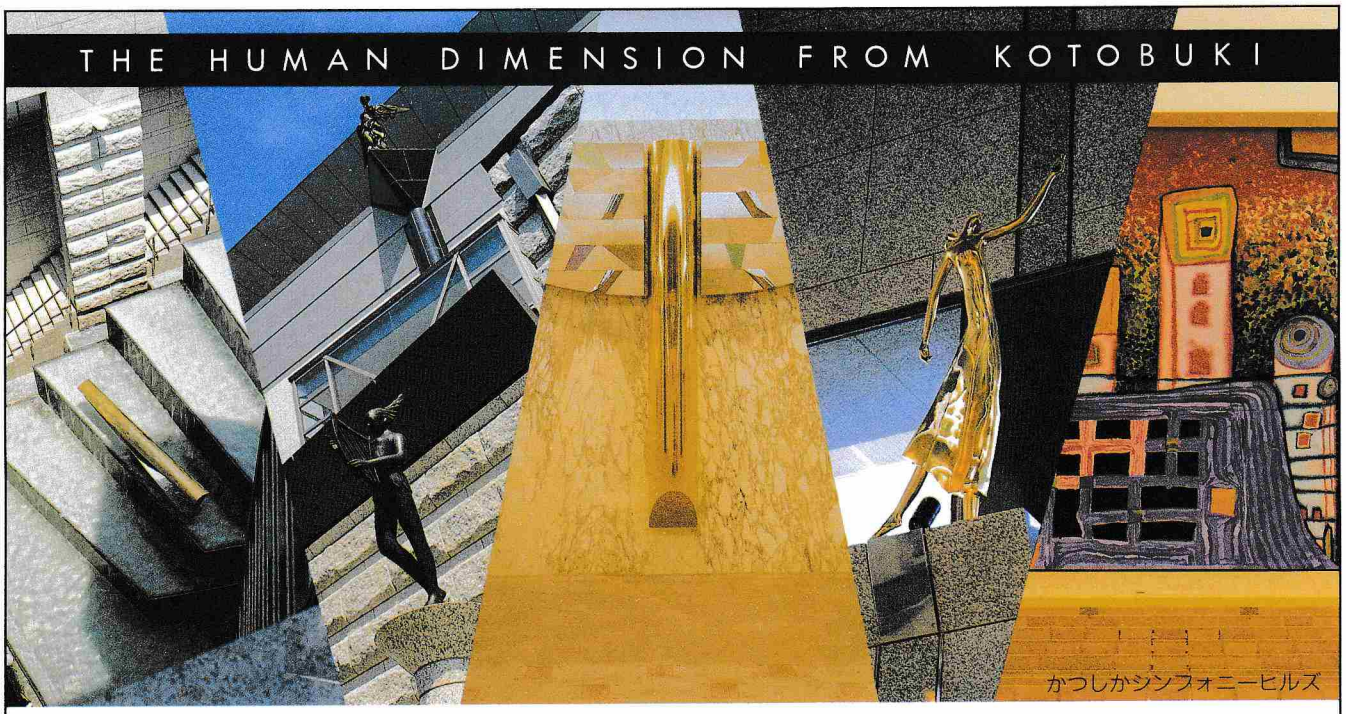
藤原会員は、５月15日にＡＡＣＡトークにて「環境芸術としての陶壁」と題して同会員の制作姿勢をお話しになりましたが、このたび作品集にして一区切りを世に示されることになり前記出版記念会を催されます。これからの益々のご発展を期待いたします。



発行：社団法人日本建築美術工芸協会
Phone 03-3457-7998
Fax　03-3457-1598
〒108　東京都港区芝5-26-20
建築会館6F
振替：東京 1-365085
編集：(社)日本建築美術工芸協会広報委員会
柳澤孝彦(委員長)、宇津野和俊(副委員長)
大多了介、小玉　功、崎山小夜子
高部多恵子、玉見　満、冨田俊男
製作協力：㈱SP建材エージェンシー

ローマン瓦
ROMAN FF50/SS50

丸栄陶業|瓦情報センター
〒167 東京都杉並区荻窪5-16-14/カバラビル1F
Phone:03-5397-3901 Fax:03-5397-3902
9:00a.m.↔5:30p.m.開館/毎日曜日・祝日休館
丸栄陶業株式会社
〒447 愛知県碧南市白沢町1-38
Phone:0566-48-1511(代) Fax:0566-48-1694



人と都市と芸術の調和。
タウンアート

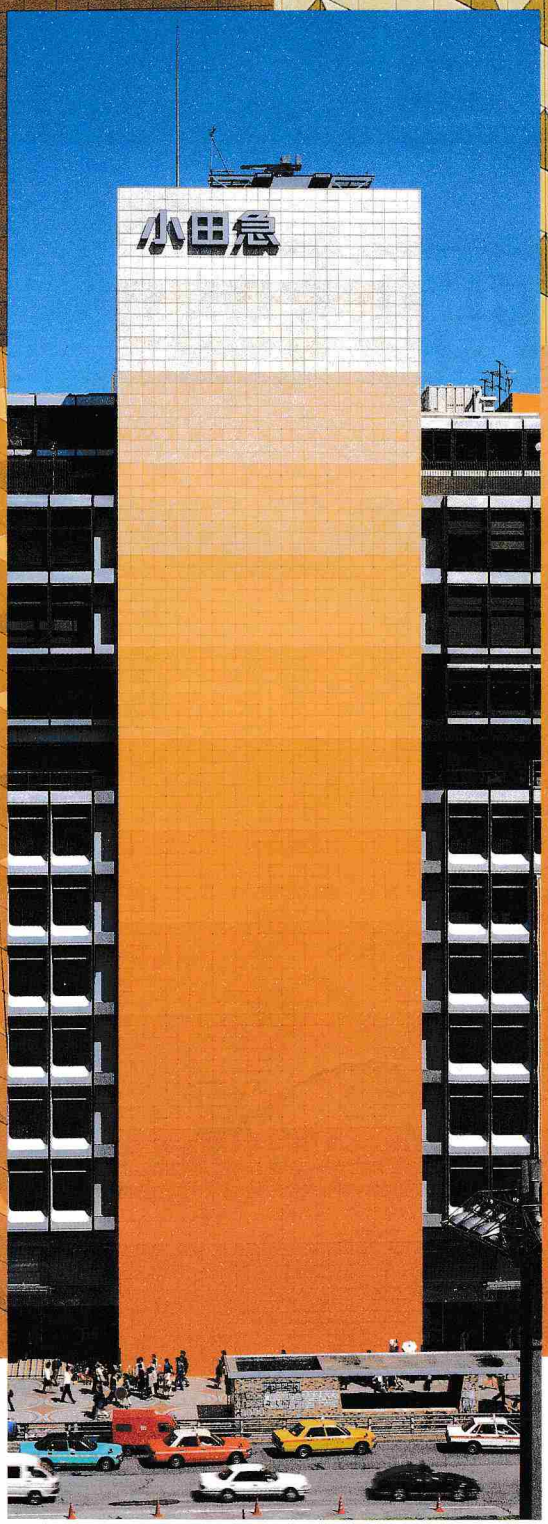
K・O・T・O・B・U・K・I
株式会社コトブキ
東京都千代田区有楽町1-2-12 〒100 Tel.03-3591-1311(代)

素材は文化を変える

OT.Ceramic Scene-1

Outside Wall

表情の変化が街を彩る。時間によって、角度によって……。



平成3年度・東京都屋外広告物コンクール・最優秀賞受賞

大型陶版(600×600)による外壁乾式改修工事

施工法/RC壁クランプ工法

新宿・小田急百貨店

大塚オーミ陶業株式会社

東京/〒101 東京都千代田区神田司町2-9 TEL.03(3294)138

大阪/〒540 大阪市中央区大手通3-2-21 TEL.06(943)6695

【営業品目】●美術陶板●建築陶板●テラコッタ●写真陶板